

日本計画行政学会中部支部研修集会

「長久手市における多世代交流型のまちづくり」

平成25年11月18日（月）、日本計画行政学会中部支部の方々が長久手市において、「長久手市における多世代交流型のまちづくり」をテーマに研修集会を行われました。

日本計画行政学会は、計画の作成、実施、評価の各過程や理論方法の研究および計画の基礎となる自然的・社会的諸条件に関する研究を行っております。

このたび、吉田一平長久手市長の講話と意見交換及び市内施設の見学が行われましたので、市長講話の内容を、同席した市職員の感想とともに紹介します。

2年にわたる市長の行政運営について

市長になり、総合計画などの市がつくった計画が役所と議会にし
か認識されておらず、住民が意識していないことを痛感しました。

各々の計画には、住民参加が謳われていますが、当の住民が知らな
いため、就任以来、計画づくりは、時間がかかっても良いので、住
民参加で取り組むよう指示をしています。

住民参加といっても、役所には人に集まってもらう手立ても知恵
もありません。広報とホームページに載せただけでは、人は集まっ
てもらえません。現在も、様々な計画づくりが進んでいますが、同
じような人が集まり、同じような活動をしているのが現状です。

これからは、住民に役所に来ってもらう時代ではありません。地域
で必要な機能を地域に持っていただかなくてはなりません。この

11月9日には、西小学校区に地域共生ステーションが完成しまし

たが、このプロジェクトは計画づくりの段階から住民参加で始まっています。完成まで時間がかかりましたが、住民とトコトン話し合うことが重要です。

以前、役所からのアンケート調査が多いと住民に言われたことがあります。市域は広くないので、アンケート調査に頼るのではなく職員には街に出て課題を見つけ、その課題の解決方法を先進市町で勉強してくるように言っています。

市政において、過去50年で失ってしまった3つのフラッグにある「つながり」「あんしん」「みどり」を取り戻すことを基本理念としています。予算をかけない、まちづくりの取組みとして、あいさつ運動を行っています。役所が行うべきこともあります。住民同士があいさつを交わし、近所の人に助けてといえる環境をつくることが重要だと考えています。

市長講話のあと、学会の方から、次のような意見をいただきました。

- 外から見ていると長久手市の発展はうらやましい。
- 地域ごとに特色があるので、一律的な計画づくりは失敗する。
- 住民参加が少ないのは、市に問題がないことの表れではないか。

また、三重県松坂市の住民協議会の紹介がされました。職員が地域に入り、意見のとりまとめを行うことで、地域との信頼が生まれているとのこと。

このお話を聞いて、市長の言われる「地域に出て課題を見つける」ことの重要性を改めて感じました。そのためには、職員自身の意識を変え、住民の声を聞いて、勉強していかなければなりません。長久手市は人口が増加しているとはいえ、これからの人口減少、高齢化が進んでいくまちづくりを、職員も住民も一緒になって勉強していく時期にきているのではないのでしょうか。